ミカンハダニ撲滅大作戦!!

～その①　露地温州ミカン～

佐賀県果樹試験場　病害虫研究担当
近藤知弥

今年は梅雨前の降雨が少なかったこともあり、ミカンハダニの発生が多くみられ、すでにミカンハダニに悩まされている方もいることと思います。

現在、ミカンハダニ対策としてマシン油乳剤を中心とした防除体系が実施されています。

七月からは、マシン油乳剤を使用しない時期になります。そのため、殺ダニ剤の効果的な使用時期を確認するとともに、冬期以降のマシン油乳剤の効果的な使い方も再確認して、これからのミカンハダニの防除にご活用してください。

本年はミカンハダニの発生が多く見られます。適期に効果的な防除を心がけてください。

殺ダニ剤の効果

ミカンハダニに対しては、マシン油乳剤中心の防除が行われており、殺ダニ剤をあまり使用しない体系になっています。

これは、ミカンハダニに対して同じ殺ダニ剤を何回か散布すると、その殺ダニ剤が効かなくなってしまうことがあるためです（これを、感受性の低下といいます）。

しかし、マシン油乳剤を上手に利用して、殺ダニ剤の散布回数が少ない露地のミカンハダニでは、第一表のように効果に問題はありません。

八月から九月中旬の防除

八月から九月中旬までのミカンハダニは、マシン油乳剤は使用せず、殺ダニ剤を使用して防除します。

果実での被害回避のために、八月中旬から九月上旬のミカンハダニが極低密度時（一葉当たり雌成虫数〇・五～一頭）に、コロマイト水和剤二、〇〇〇倍、カネマイトフロアブル一、〇〇〇倍、バロックフロアブル二、〇〇〇倍、マイトコ：ネフロアブル一、〇〇〇倍、ダニエモンフロアブル四、〇〇〇倍のいずれかを散布します。

ただし、感受性の低下を避けるため同じ殺ダニ剤は年一回の使用とし、昨年（できれば一昨年から）散布しなかった薬剤を選択します。

なお、バロックフロアブルは殺成虫効果がないため防除効果が目に見えるまで七～一〇日ほどかかるので、感受性の低下と間違えないようにしましょう。

九月下旬以降の防除

九月下旬以降にミカンハダニの防除を行う場合は、上記の殺ダニ剤ではなくパノコン乳剤一、〇〇〇倍（収穫三日前まで）またはオマイト水和剤七五〇倍（収穫一四日前まで）のいずれかを使用します。

ただし、パノコン乳剤は温州ミカンでしか使用できません。

また、オマイト水和剤は高温時の散布で薬害が生じるので、一〇月中旬以降の使用とします。

なお、パノコン乳剤も殺成虫効果がなく、防除効果が目に見えるまで七～一〇日ほどかかるので注意します。

冬期の防除

一二月中旬から一月上旬の冬期に、越冬しているミカンハダニ対策としてマシン油乳剤九七％の六〇倍を散布します。

この時期の防除は、ミカンハダニ

第一表　佐賀県内各地域露地カンキツから採集されたミカンハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性

調査年	地域名	圃場No.	補正死亡率（%） コロマイト水和剤 6,000倍	パロックフロアブル 6,000倍	カネマイト水和剤 3,000倍	マイトコーネフロアブル 3,000倍	オマイト水和剤 2,250倍	パノコン乳剤 2,100倍	ダニエモンフロアブル 12,000倍
2005	小城	1	○	○	○	○	○	—	○
		2	○	○	○	○	○	—	○
	神埼	1	○	○	○	○	○	—	○
		2	○	○	○	○	○	—	○
	浜玉	1	○	×	○	○	○	—	×
	鹿島	1	○	○	×	×	—	—	○
	太良	1	○	○	○	○	—	—	○
		1	○	○	○	○	—	—	○
2006	小城	1	○	○	○	×	○	○	○
		2	○	○	○	×	○	○	○
	神埼	1	○	○	○	×	○	○	○
		2	○	○	○	×	○	○	○
	浜玉	1	○	○	○	○	○	○	○
	鹿島	1	○	○	○	○	○	○	○
	太良	1	○	○	○	○	○	○	○
		2	○	○	○	○	○	○	○

注1）—は未調査

注2）補正死亡率が80%以上で感受性が高いものを○，80%以下で低いものを×

だけではなく同様に越冬中のカイガラムシ類にも効果的であるため、その後の生育期の防除が楽になります。

その際、主幹部や葉裏などの薬液のかかりにくい所まで十分かかるように丁寧に散布することが大切です。

ただし、一月中旬から二月までの厳寒期はマシン油乳剤の散布により落葉が懸念されるので、一月上旬までに散布できなかった場合は三月上旬に行います。

なお、樹勢が低下している場合はマシン油乳剤の散布は控えて生育期の防除で対応します。

四月から六月までの防除

四月から六月までのミカンハダニの防除にはマシン油乳剤を利用し、殺ダニ剤の使用を極力控えます。

マシン油乳剤の濃度は二〇〇倍とし、雨に流されやすいので二～三日降雨のないことが予想される日に散布します。

ただし、樹勢が低下している樹に対しては散布しません。

なお、黒点病の防除薬剤であるジマンダイセン水和剤にマシン油乳剤を加用すると、殺菌剤の対雨性が向上し残効を長くすることができます。

その際、加用するマシン油乳剤の濃度はミカンハダニが発生している場合は二〇〇倍、発生していない場合は四〇〇倍とします。

この時期のマシン油乳剤の使用に際しての注意点として、

①着果期以降に、デランフロアブルと混用・近接散布しない。

マシン油乳剤とデランフロアブルを混用・近接散布すると、果実に薬害が生じる恐れがあります。

②サンマイト水和剤と混用しない。

サンマイト水和剤にマシン油乳剤を混用すると、ミカンサビダニに対する効果が低下します。

③マシン油乳剤の利用は六月まで。

マシン油乳剤を七月以降に使用すると、糖度低下の原因となったり腐敗が助長されます。

この3点があります。

樹勢が低下してマシン油乳剤が使用できない場合は、コロマイト水和剤二、〇〇〇倍、カネマイトフロアブル一、〇〇〇倍、マイトコーネフロアブル一、〇〇〇倍、ダニエモンフロアブル四、〇〇〇倍で対応します。

なお、殺ダニ剤を散布する際は散布ムラがないように葉裏にも丁寧に散布します。

また、コロマイト水和剤、カネマイトフロアブル、パロックフロアブル、マイトコーネフロアブル、ダニエモンフロアブルは、登録された散布量を守りましょう。